



<北陸発>

にぎわい

通巻69号
(平成16年3月号)

～日本海にぎわい・交流海道ネットワーク通信～

会員だより【新潟県寺泊町】

いちどは来なせや“寺泊”

寺泊は奈良時代の文献に初めてその名が記され、北国街道の宿場町として、また、古くから佐渡への渡航地として有名で、順徳上皇や日蓮上人がここから佐渡へ渡られております。

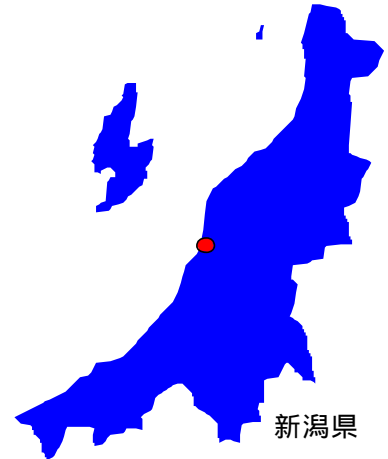
寺泊港が最も繁栄したのは江戸時代で、当時の商業の中心地であった大阪から瀬戸内海を經由して北海道と交易する「北前船」の寄港地として海上交通の要衝でありました。

時代を経て、明治以降、陸上交通機関の発達とともに海運の需要は減少しましたが、「本土」と「佐渡ヶ島」を結ぶ最短航路として寺泊港と赤泊港の間をカーフェリーが通年運行しております。

毎年5月のゴールデンウィークや夏休み期間中は県内外から多数の観光客がおいでになって寺泊から佐渡に渡られるため、この時期はカーフェリーの運行回数が増便されております。

寺泊町は、「美しい海とおいしい魚」をメインとした観光立町を目指しており、関東都市圏を中心とした地域からの観光客は年間約200万人となっております。この観光客を一過性のものでなく、リピーターとして再度おいでいただくためにも、海の玄関口である「寺泊港」の周辺整備は欠かせないと考えております。

寺泊町では、毎年8月6・7日に「寺泊港まつり」を開催しております。野外特設ステージでの歌謡ショーなど盛りだくさんのプログラムが用意されていますが、最大の呼び物は海中・海空で炸裂する大花火大会で、昨年は約8万人の見物客がありました。夏の夜空に咲く大輪の花と海面に映えるシルエットを大勢の方から御覧いただきたいものです。



会員だより【福井県敦賀市】

敦賀港は、日本海側のほぼ真ん中に位置し、北東アジアと関西圏、中京圏を結ぶ中継地として、また北海道との物流拠点として機能してきました。

敦賀港は、金ヶ崎地区、桜・蓬萊地区、川崎・松栄地区からなる「本港地区」と本港北側に展開する鞠山北地区、鞠山南地区からな





る「新港地区」で構成されています。

現在は物流拠点としての発展を図るため、新港地区の整備が進んでいます。1991年（平成3年）に鞍山北岸壁が供用開始され、フェリーターミナルなどに利用されています。

鞍山南岸壁は多目的国際ターミナルとして整備が進んでおり、2007年（平成19年）に供用開始予定となっています。

貿易に関しては、外国定期コンテナ航路と国内定期フェリー航路が就航しています。

定期コンテナ航路は、釜山航路（韓国）が週3便、敦賀～丹東～大連航路（中国）が週1便就航しています。国内航路では、敦賀～苫小牧間に超高速フェリー（新日本海フェリー）が毎日、敦賀～新潟～秋田～苫小牧間航路が週3便就航しています。

また、平成14年6月からRORO船（近海郵船物流）が日曜日を除く毎日、敦賀～苫小牧間を運航しています。



「晴明の朝市」と「西町の綱引き」

敦賀は古くから天然の良港として、また大陸交易の玄関口として栄え、豊かな港町文化を創造してきました。

その敦賀の港町文化を代表するものが、「晴明の朝市」と「西町の綱引き」です。

晴明の朝市

敦賀の市場発祥の地・相生町“博物館通り”にて毎月第3日曜日の午前8時から正午まで開催されています。近くには安倍晴明ゆかりの晴明神社があり、散策する観光客の姿も見られます。素朴な雰囲気のある市は敦賀でおなじみの風景となっています。



晴明の朝市は、現在の敦賀市相生町に明治の初めごろ、地元の農家が、収穫した野菜などを売るために、通りに店を出したのが始まりです。

大正4年には、地元の篤志家清水友吉の寄付で、公設の朝市場が建設され、一時は1500軒の店が並び大盛況だったといわれています。

戦災や都市開発の影響で消滅していましたが、地元商店主が敦賀市や敦賀商工会議所などでつくる「つるがまちづくり協議会」の支援を受けて復活させました。

西町の綱引き

晴明の朝市が開催されている敦賀市相生町で、400年以上前から伝承されてきた冬の敦賀の民俗行事で、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。数百人の老若男女が「夷子（えびす）」と「大黒」の2つの軍に分かれて大綱引き大会を繰り広げます。

夷子方が勝てばその年は豊漁、大黒方が勝てばその年は豊作になると言われています。

今年は1月18日（日）に行われ、夷子方が勝って豊漁と占われました。



会員だより【石川県七尾市】

～能登灘浦の鰯網漁～

七尾市内の能登灘浦と言われている地域は、富山湾沿岸の先端にある崎山半島から富山県境までの南北約42kmの海岸線を言います。

そこは、石道山系の山並みがすぐ背後にして海に迫り、北東の風（地元ではこの風を“アイの風”といいます。）を正面に受け、海底は深くえぐられて、等深線が岸に迫っている地形です。

この地域は、秋から冬にかけて鰯の群れが潮流に乗って佐渡沖から氷見浦（富山県）、能登灘浦の順に南北に長い磯に沿って北上してくることから、鰯漁が盛んで、日本三大定置網漁業地帯の一つに挙げられています。



大敷定置網模型写真

現在もなお盛んな鰯網漁は、能登灘浦の財産として受け継がれています。



この地域での定置網の記録は天正10年（1582年）前田利家が地元にあてた文書に記されており、当時はすでに鰯網がおろされていました。

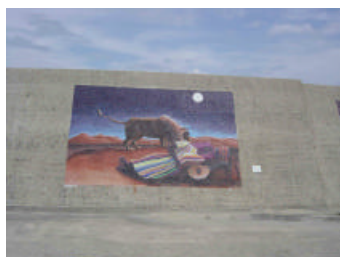
しかし、当時とすれば研究された網型であったと思われましたが、せっかく鰯が頭をつっこんでも、すぐに抜けるという欠点がありました。そこで年々改良が加えられ、現在の『大敷網（おおしきあみ）』へと変遷し、改良を重ねていくことになりました。

～アートな漁港～

能登灘浦の一つにある、佐々波漁港は地元ではアートな漁港として有名です。

数年前に佐々波漁港に許可をもらい、協力のもと、金沢市立美術工芸大学の学生が制作過程の一貫で漁港内の防波堤壁面に絵を書いたことが始まりです。

地元漁師さんも壁面に描かれたアート作品を眺め、教養を豊にするという意味も含めて描かれたアート作品。この漁港は普段からたくさん釣り人が来ることから、美術館に行かなくても多くの人が身近にアートに触れることができる漁港として、イメージアップにつながっております。



石川県



(能登灘浦)

会員だより【富山県富山市】

「運河まつり2003」の開催

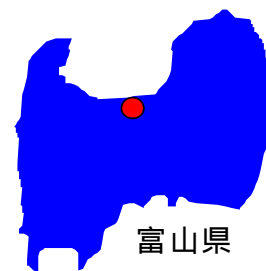
去る平成15年10月13日（祝・月）に富岩運河を舞台に「運河まつり2003」が開催されました。

この「運河まつり2003」は富山市愛宕、奥田そして奥田北校下自治振興会、富山市カヌー連盟、富山県ボート協会などの地元団体が中心となった運河まつり実行委員会の企画運営によるもので、富山市北部地域のにぎわいづくりと運河の利活用をテーマに準備が進められました。

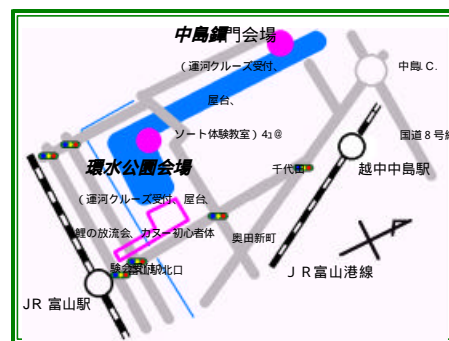
内容としては、JR富山駅北口から富岩運河船溜まりまでをオープンカフェ、屋台フリーマーケットで繋ぎ、そこからはプレジャーボートを使った運河クルーズで国指定重要文化財中島開門まで人の流れをつくるという構想のもと、カヌー・ボート体験会、大道芸パフォーマンス、鯉の放流会など来場者に楽しんでもらう仕掛けが考えられました。

開催当日、早朝からのあいにくの雨により、100店舗以上申込のあったフリーマーケットが中止になるなど、予定変更を余儀なくされましたが、その最悪のコンディションの中で、運河クルーズにおいては乗船を断らなければならないほどの盛況ぶりを見せるなど、運河を軸としたにぎわい創出への可能性を十分に感じるここのできる結果が得られました。

今年は10月10日（日）に開催が予定されており、さらなる仕掛けが用意されているようです。



富山県



会場配置図



中島開門を通過する参加者



鯉を放流する児童ら



大道芸パフォーマンス

編集・問い合わせ先 日本海にぎわい・交流海道ネットワーク事務局

北陸地方整備局 港湾空港部 港湾計画課：武田、川見 TEL 025-265-7781